海外シリーズ

アラビアの回想

矢部　賢

昨年10月の下旬に，金属の上田先生，応化の逢坂先生にお伴して，イスラエルへ短い旅をした。

四年前に，京都で金属表面処理の国際会議が持たれた時から，次の開催国への先生方の参加は，約束事になっていた。我が国からは7報文の発表があり，吉田研O・Bの沢井氏（沖電気）を加え，発表者の半数近くが同門ということで，応援団の私も肩身が広かった。

応援団として参加させて頂いた理由は，表面処理業界の情報蒐集よりも，若い日に働いていたアラブを，裏側から覗くことの方に気持が動いたのが本音である。

元は兄弟でありながら，今は越えることのできない心の壁によって隔てられた国々の悲劇を幾つか見た。南北朝鮮であり，東西ドイツであり，アラブとイスラエルである。政治的イデオロギーの軋轢は，何時か妥協の日があるように想う。しかし彼我の間にわだかまる信教の争いは人類滅亡の日まで，遂に和解されることがないのではなかろうか？。この人間の心に巣くう矛盾の分岐点であるエルサレムを，確かめたい気持が，30年来，想いの片隅に在った。

テルアビブで

アクロポリスで有名なアテネから，ギリシャの富豪オナシスの経営するオリンピア航空の厄介になって，テルアビブに着いた。日本赤軍が一躍有名を馳せた空港である。

僅かばかりのドルを，シケルという通貨に替ええようとして，イスラエル人に囁かれた。「沢山替えない方がいいよ，年率500％のインフレだから」と言う。なるほど，この日1ドル440シケルが，4日後にここを去る時は460になった。自国の通貨より，ドルで支払いを望む彼等の経済破綻に，アラブの只中で孤立する軍事強国アキレス腱を見た。

事実，今回の国際会議へのイスラエルの参加者の多くは，一部，ソーラ関係を除けば，大部分が兵器産業の関係者であったことと尋ね合わせると，かなり経済的な無理があるように思われた。

空港に連なる地中海の空は，あくまで青く，行き交う人々の表情にも，小じんまりした空港ビルの何所にも，テロに纏る暗い陰は少しもないように見えた。ガイドして頂いたヘブライ大学の日本人学者から僅かに，異国の獄舎に縛れた赤軍兵士の哀れを伺ったのみである。しかし，父祖伝来のオアシスであるパレスチナから，自らの過ちもないのに，不毛のヨルダンの砂漠に追われ，クェートに出稼ぎして，細々と生活していたかつてのアラブの友の語らいを想うと，どんな訴えも通らず，世界中から見放された彼等がその不当をなじるために，残された手段を，ニヒルなテロに求める心情が解らないではない。

そんなことを思いながら，この地方には珍しい

株式会社　大崎金属　代表取締役副社長
（昭和28年応用化学科卒・新制3回）

豪雨の被害を受けたという綿畠を眺め，赤茶けた丘陵地帯を，エルサレムへ向って車を走らせた。

エルサレムの城壁

イスラエルのなだらかな西斜面は，地中海の湿度を受けて，アラビア地帯には稀に見る緑に恵まれた豊穣の地である。しかし，海抜下400mの死海に落ち込む東斜面は，恐ろしい程の赤暗い不毛の谷である。この分水嶺に小高い丘と幾つかの小さい谷を挾んでエルサレムの街が拡がっている。この中の，南に開けた1つの谷に，ダビデ王やソロモン王が築いた神殿がある。神殿というよりは，三千数百年来構築と崩壊を繰返した城塞である。その間に，幾度となく積み重ねた「嘆きの壁」と呼ばれる巨大な石垣の上には，ユダヤの神殿と同じ城壁の中に，対面して巨大な黄金のムードのモスク（回教寺院）が同居していた。薄暗いモスクの中心には直径30mもある自然石の一枚岩があって，1300年前に，その岩から，開祖マホメット（ムハンマッド）が昇天したと伝えられる。ここに参詣するアラブ人達に声を掛けると，気軽に家族を紹介して呉れた。今は，僅か10%といわれるアラブの土地っ子も居たが，近郊からの巡礼者が多かった。

下の「嘆きの壁」には，沢山のユダヤ教徒が額を幾度となく摺り付けるようにして祈り，一方のモスクでは，回教徒が床にひれ伏して祈っている。セム族の同朋たるべき人々が，同じ場所の裏表で，それぞれの神に祈りを捧げながら，千年を超える間，世界を二分して血で血を洗う抗争を続けて来たことを想うと，この異様な光景の中に，人の心を救うべき宗教がますます分化分裂を続け，やがては，カトリックとプロテスタントの争いや，現在のアラブ諸国の争いなどの根元になる何かがあるように思えてならない。顧みて，私達の仏教の様々な変化まで考えると，すでに人間よりも宗教を済度する宗教が必要なのではあるまいか。

石畳みの路

エルサレムの旧市街は，三千年来，街の上に街を重ねて行ったような町である。キリストが断罪された牢から，処刑されたゴルゴタの丘までの，十字架を背負って引かれたと伝えられる径は，石灰岩質の石畳みに覆われていた。牢獄の跡らしき所は，古い家屋の下のローマ時代の地下水槽に接していた。湿度を帯びた石床には，戦車の轍と伝えられる幾条もの溝が，靴の滑りを止めて呉れた。今はその径の10数m上というが，民家をかき分けるようにして，クリスチャンの巡礼者に混って，受難の跡を辿った。途々のバザールの臭いは，バーレンやクエートやカイロの裏街を次々と想い出させた。商いに呼び合うアラビア数字も懐かしさを募らせた。ゴルゴタの丘の上に建てられたという聖墳墓教会は，遺骸を祭った小さい教会をそっくり中に納めた，沢山の柱に支えられた暗い大きな建物であり，丘というよりは，密集した古い街の谷間の中に在った。アラブの宗教遺跡とは明らかに千年の貫禄の差があったが，同時に，山肌に散在する石灰岩を用いた，石材に恵まれた文化と，アラビア半島東側の泥と木で作られた造形との，精度と風化の違いを感じた。しかし，いずれにしても，2千年の昔が昨日の事のように語られるこの街と，その頃は，神代の伝承にしか求めることのできない我々との，歴史と文化遺産の格差の余りの大きさに驚いた。

死海にて

南北約80km，東西約15kmの死海は地中海から100km，エルサレムから20kmの東に在る。その湖面は海面下400m，深さも最大400m，塩濃度は飽和点に達し，湖中に食塩の柱ができる程である。有名なこの湖で，是非泳いでみたいものと思って案内して貰った。エルサレムから東は聖書のままの乾ききった荒野である。この道を高度差で約700m下ると，やがて彼方にエリコの町が見える。最近まではエルサレムの一部と共にヨルダンの領内だった。Go to Jericho！「くたばれ！」という

言葉から，地の涯てを連想するが，旧パレスチナ一帯を潤す命の水源であるヨルダン川が死海に注ぐ所，正に砂漠の底のオアシスで，そこここになつめ椰子の林が散見された。5000年の人類初期の文化遺跡が発掘された旧約からの町である。死海の谷は，10月末というのに30度を遙かに越える暑さで，炎天の下で対岸のヨルダンの高原に連なる山々は，湖からの蒸気に，霞んで見えた。イスラエルの兵舎とラクダが群れ遊ぶ灌木帯を抜けて湖岸をひた走るが，両岸の恐ろしい程の荒涼たる山肌に較べ，水辺近く，帯のように延びる葦と椰子の林は，湖の青さに映えて深い緑を成していた。

湖の塩は眼に滲みて，苦い程辛く，眞っ青な湖水は生ぬるく，油のように滑り，比重1.3に達するその中では，仰向いて両手足を水面上に出したまゝ新聞を繰って読める程に体が浮いた。1日約600万トンのヨルダン川の水と湖水全面の蒸気量が見事に平衡点に達して，旧約のヨシアが見た湖も，私達が見る湖も，余り変っていないのが不思議である。幾千万年の昔は湖が幾十倍もあったのかも知れないが，その古さに比べ，人類の営みの如何に小さく短いものか，想い識らされた。

この湖に地中海から100km余のトンネルと水路を引き，海水を死海に注ごうという計画が，日本の企業に相談されたそうである。

落差を利用した発電，湖での蒸気による造塩工業，砂漠の緑化，魚類の養殖，観光等々一石数鳥を狙った国家事業である。中には，この水路で引いた海水で池を沢山作り，ユダヤ人の食べない海老を養殖して，日本に売ろうという考えまであるそうで，この地ならではのアイデアと感心した。

コーシエル（食事規範）

ご承知のように，回教徒は豚肉を食べることを禁ぜられている。イスラエルでも，コーシエルと称する規範があって，同じように豚や甲殻類を食べない約束がある。戒律の厳しいアラビア東海岸の回教徒では，酒が許されず，魚や肉は，必ず焼くか，煮て食べていた。汁のような物も飲まず，袋や壜から水を飲む時は唇から離し，右の手で食べ左手で用便をした。

往時，クエートの魚市場で，50cmを超える鯛を千円そこそこで買ってきては，刺身にして酒盛りしていると，異端者の所業に神罰でも下るのでは？と思ってか，現地の仲間が子供連れで見物に来たものであった。彼等と砂漠地帯で行動を共にしていると，この食習慣が，生活集団に最悪を招かないための，衛生上の作法であることに気付いた。

イスラエルの旅で，回教の戒律は開祖マホメットが，基を1にするユダヤやキリストの教義を咀しやくした上で，その良い所を充分にとり入れ，荒野に生きる民族の生活の規範を示したものだということを再認識した。偶像崇拝を禁じ，酒を戒め，危険が予測される食物や不衛生を避け，常に自分と対手の平安を祈ることを習慣付けるなど，いずれの神の教えにも間違いがあるはずはないのだが，この信教が，人間の心の中で育つ中に，次第に汚染されてしまうのはどうしたことかと想う。

回教徒と先の事を約束する時，彼等は必ず「インシャーラー」と応える。「神の御心に添うなれば」という意味である。約束通り精一杯努力するけれど，成否は神の御心次第だという答えしか，彼等にはできないのである。先のことは神のみぞ識る，誰にも解らない。アラビアでの仕事の予定は，総てこの調子であった。「ケ・セラセラ」という言葉も，どこかの国にあったのを想いだす。